

【翻訳】

章学誠『校讎通義』訳注（三）

卷一「著録殘逸第八」「藏書第九」・卷二「補校漢藝文志第十」

文教大学目録学研究会 訳

（向嶋成美・坂口三樹・樋口泰裕・渡邊大・
宇賀神秀一・加藤文彬・小田健太・王連旺）

本稿は、章学誠『校讎通義』の訳注である。今号では、卷一の「著録殘逸第八」「藏書第九」、及び卷二の「補校漢藝文志第十」を訳出する。各条の担当は、卷一の二条が樋口、卷二の十条が宇賀神である。前号に引き続き、底本には、葉瑛『文史通義校注』（中華書局、一九八五年）を用い、あわせて、嘉業堂本、劉公純標本の『文史通義』（古籍出版社、一九五六年、中華書局新一版、一九六一年）、葉長清『文史通義注』（無錫国学專修学校叢書、一九三五年）、王重民『校讎通義通解』（上海古籍出版社、一九八七年、傅傑導読、田映・注本、上海古籍出版社、二〇〇九年）、劉兆祐『校讎通義今註今訳』（台湾学生書局、二〇一二年）などを参照した。

キーワード…校讎通義 章学誠 鄭樵 班固 漢書藝文志

著録殘逸第八

【原文】

凡著録之書、有當時遺漏失載者、有著録殘逸不全者。漢書藝文志注卷次部目、與本志不符、顔師古已云、歲月久遠、無由詳知矣^{〔一〕}。今觀蕭何律令、叔孫朝儀、張霸尚書、尹更始春秋之類、皆顯著紀傳、而本志不收^{〔二〕}。此非當時之遺漏、必其本志有殘逸不全者矣^{〔三〕}。舊唐書經籍志集部内、無韓愈、柳宗元、李翱、孫樵之文、又無杜甫、李白、王維、白居易之詩、此亦非當時之遺漏、必其本志有殘逸不全者矣^{〔四〕}。校讎家所當歷稽載籍、補於藝文之略者也。

【訓読文】

凡て著録の書、當時に遺漏して載するを失う者有り、著録の殘逸して全からざる者有り。「漢書藝文志」卷次部目を注して、本志と符せず、顔師古已に云う、「歲月久遠にして、詳かに知るに由無し」と。今「蕭何律令」、「叔孫朝儀」、「張霸尚書」、「尹更始春秋」の類を觀るに、皆紀伝に顯著なるも、本志收めず。此れ當時の遺

漏に非ずして、必ず其の本志に殘逸して全からざる者有り。「旧唐書經籍志」集部の内に、韓愈、柳宗元、李翱、孫樵の文無し、又た杜甫、李白、王維、白居易の詩も無し、此れも亦た當時の遺漏に非ずして、必ず其の本志に殘逸して全からざる者有り。校讎家の當に載籍を歷稽し、藝文の略を補うべき者なり。

【現代語訳】

おしなべて目録には、目録編纂當時において書物を遺漏して記載していない場合があり、また目録自体が散逸して完全でない場合がある。「漢書藝文志」は卷次部目を注記しているが、芸文志本文と符合しておらず、このことについては顔師古がつとに、「歲月が経つて久しく遠いことで、いまや詳しく知る術はない」と述べている。いま「蕭何律令」、「叔孫朝儀」、「張霸尚書」、「尹更始春秋」の例を見れば、いずれも本紀や列伝などに明記されているのに、芸文志は収録していない。これは著録當時に遺漏したのではなく、恐らく芸文志自体に散逸して完全でないところがあるということなのである。また、「旧唐書經籍志」の集部には、韓愈、

柳宗元、李翱、孫樵の文集が見えず、更には杜甫、李白、王維、白居易の詩集も見えないのも、目録編纂當時に遺漏したのではなく、恐らくこの経籍志自体に散逸して完全でないところがあるのである。校讎家は群書をあまねく調べ、そうした目録を補うべきである。

【訳注】

一 「漢書芸文志」序文に付せられた顔師古注に、「刪去浮冗、取其指要也。其每略所條家及篇數、有與總凡不同者、轉寫脱誤、年代久遠、無以詳知。」と見える。

二 「蕭何律令」については、『漢書』刑法志に「漢興、高祖初入關、約法三章曰、『殺人者死、傷人及盜抵罪。』獨削煩苛、兆民大說。其後四夷未附、兵革未息、三章之法不足以禦姦、於是相國蕭何摭摭秦法、取其宜於時者、作律九章。」と見える。「叔孫朝儀」については、『漢書』叔孫通伝に「高帝崩、孝惠即位、乃謂通曰、『先帝園陵寢廟、羣臣莫習。』徙通爲奉常、定宗廟儀法。及稍定漢諸儀法、皆通所論著也。」と見え、また『後漢書』曹褒伝に「章和元年正月、乃召褒詣嘉德門、令小黃門持班固所上叔孫通漢儀十二篇。」とある。「張霸尚書」については、『漢書』孔安国伝に「世所傳百兩篇者、出東萊張霸、分析合二十九篇以爲數十、又采左氏傳、書敍爲作首尾、凡百二篇、篇或數簡、文意淺陋。成帝時求其古文者、霸以能爲百兩徵、以中書校之、非是。」と見え

る。「尹更始」については、『漢書』江公伝に「汝南尹更始翁君本自事千秋、能說矣……乃召五經名儒太子太傅蕭望之等大議殿中、平公羊、穀梁同異、各以經處是非。時公羊博士嚴彭祖、侍郎申輓、伊推、宋顯、穀梁議郎尹更始、待詔劉向、周慶、丁姓並論。……尹更始爲諫大夫、長樂戸將、又受左氏傳、取其變理合者以爲章句、傳子咸及翟方進、琅邪房鳳。」と見える。

三 「蕭何律令」については、「補校漢芸文志」では、鄭樵が『七略』、『漢書藝文志』の遺漏として批判しているのに対し、劉向が直接校讎したのは「中秘」が蔵する六芸略、諸子略、詩賦略の三略の書物であり、兵方略、數術略、方技略の書物については専門の官職が掌り、劉向の関与するところではなかったことから、『七略』に遺漏が生じたのもやむを得ないことであると述べ、本章とはまた異なる見解を示している。

四 章氏がここに例として挙げる文人はいずれも盛唐以降、中晚唐期に活躍した文人であれば、開元年間に成書した毋嬰『古今書録』に基づきつつ、天宝以降の著述については敢えて著録の対象にしなかった「旧唐書經籍志」が彼らの別集を著録していないのは当然のことで、それを目録自体が散逸したとするのは章氏の誤解である。「旧唐書經籍志」序文に「嬰等四部目及釋道目、並有小序及注撰人姓氏、卷軸繁多、今並略之、但紀篇部、以表我朝文物之大。其釋道錄目附本書、今亦不取、據開元經籍爲之志。天寶已後、名

公各著文章、儒者多有撰述、或記禮法之沿革、或裁國史之繁略、皆張部類、其徒實繁。臣以後出之書、在開元四部之外、不欲雜其本部、今據所聞、附撰人等傳。其諸公文集、亦見本傳、此並不錄。」と述べる通りである。なお、王重民氏は章学誠が依拠した説として武英殿刊本『旧唐書』卷四十七「考証」の沈德潜の言を指摘している。沈氏の言は以下の通り。「按丁部集録内唐人、自盧藏用後、遽接沙門道士諸集、而開元以來、文如張說、蘇頌、陸贄、權德輿、韓愈、柳宗元、李翱、孫樵、劉蛻、杜牧諸人、詩如張九齡、王維、孟浩然、李白、杜甫、元結、李觀、韋應物、白居易、李商隱諸人、皆不與焉。其爲殘闕無疑也。又沙門中無皎然、靈徹、貫休、齊己、道士中無吳筠、司馬承禎、婦人中無上官昭容、亦屬漏略。備觀新書所載、庶乎完善云。」

藏書第九

【原文】

孔子欲藏書周室、子路以謂周室之守藏史老聃、可以與謀^{〔一〕}。説雖出於莊子、然藏書之法、古有之矣。太史公抽石室金匱之書、成百三十篇、則謂藏之名山、副在京師^{〔二〕}。然則書之有藏、自古已然、不特佛老二家、有所謂道藏、佛藏已也^{〔三〕}。鄭樵以謂性命之書、往往

出於道藏、小説之書、往往出於釋藏^{〔四〕}。夫儒書散失、至於學者已久失其傳、而反能得之^{〔五〕}二氏者、以二氏有藏以爲之永久也。夫道藏必於洞天、而佛藏必於叢刹、然則尼山、泗水之間、有謀禹穴藏書之舊典者^{〔六〕}、抑亦可以補中祕之所不逮歟。

【訓読文】

孔子書を周室に藏せんと欲し、子路以謂く周室の守藏史老聃、以て与に謀るべし、と。説は『莊子』に出づと雖も、然るに藏書の法、古より之有り。太史公石室金匱の書を抽して、百三十篇を成し、則ち「之を名山に藏し、副は京師に在り」と謂う。然らば則ち書の藏する有るは、古より已に然り、特だ佛老の二家に、所謂「道藏」、「佛藏」有るのみならず。鄭樵以謂く性命の書は、往往にして道藏に出で、小説の書は、往往にして釈藏に出づ、と。夫れ儒書散失し、學者已に久しく其の伝うるを失うも、反て能く之を二氏に得るに至るは、二氏に藏する有りて、以て之が爲に永久たらしむるを以てすればなり。夫れ道藏は必ず洞天に於いてし、佛藏は必ず叢刹に於いてす、然らば則ち尼山、

泗水の間、禹穴藏書の旧典を謀る者有れば、抑そも亦た以て中祕の逮ばざる所を補うべきなるか。

【現代語訳】

藏書

孔子は書物を周室に收藏しようとし、そこで子路は周室の守藏史の老聃がおり、彼と謀ればよいと考えた。この話は『莊子』から出ているとはいえ、書物を藏するという考え方は古くからあったのである。太史公司馬遷は石室金匱に伝わる書物を選んで資料とし、『太史公書』百三十篇を完成させて、「正本は名山に收藏し、副本は京都に置く」と述べている。そうであるから、書物を收藏するということは、古来つとに行われていたことで、とりたてて仏家と道家の二家に、いわゆる「道藏」と「仏藏」があったばかりではないのである。鄭樵は、性命に関する書物は、しばしば「道藏」中に見出され、小説の類の書物は、しばしば「仏藏」中に見出せると考えている。一体、儒家の書物が散逸して、学者たちは長らく伝承を失ってしまい、それらが却って道家、仏家の二家より得ることができるといふこと

になったのは、二家が書物を收藏し、そうすることで永遠であらしめようとしたことによるだろう。『道藏』は恐らく洞天に置かれ、「仏藏」は恐らく僧侶の集まる寺院に置かれていたのであれば、孔子の故郷の尼山や泗水のあたりで、禹穴に收藏されたような古典籍を探してみると、さて、それによって宮中に藏される図書の欠を補うことができるだろうか。

【訳注】

一 『莊子』天道篇に「孔子西藏書於周室。子路謀曰、『由聞周之微藏史有老聃者、免而歸居、夫子欲藏書、則試往因焉。』」と見える。

二 『史記』太史公自序に「卒三歳而遷爲太史令、紬史記石室金匱之書。」と見える。「石室金匱之書」について、司馬貞『索隱』は「案、石室、金匱皆國家藏書之處。」と注する。

また、同じく太史公自序に「凡百三十篇、五十二萬六千五百字、爲太史公書。序略、以拾遺補藝、成一家之言、厥協六經異傳、整齊百家雜語、藏之名山、副在京師、俟後世聖人君子。」とある。

三 「道藏」は、劉宋の陸修静が編纂した『三洞經書目錄』がその原型とされる。以後、唐、宋、金などの歴代の王朝において編纂され、現在行われているものは、明の正統年

間に編纂された「正統道藏」と万暦年間に続編として加えられた「万暦統道藏」である。

四 『通史』校讎略「求書之道論」に次のように述べる。「凡性命道德之書、可以求之道家。小學文字之書、可以求之釋氏。如『素履子』、『玄眞子』、『尹子』、『鬻子』之類、道家皆有。如『蒼頡篇』、『龍龕手鑑』、郭忠『音訣字母』之類、釋氏皆有。『周易』之書、多藏於卜筮家。『洪範』之書、多藏於五行家。且如邢璣『周易略例正義』、今道藏有之。京房『周易飛伏例』、卜筮家有之。此之謂傍類以求。」鄭樵が仏家の藏書に求めやすいと指摘しているのは「小学文字之書」である。鄭樵のこの一節について、「互著」篇でも言及されていたのであれば、ここでの「小説」は「小学」の誤りの可能性が高い。ただ、仏藏にはいわゆる仏教説話集の類いの書物も多く含まれるのであれば、それによつて「小説」の書を補うことができるという指摘自体は必ずしも誤りではないだろう。

五 『史記』孔子世家に、「紇與顔氏女野合而生孔子、禱於尼丘得孔子」、また「孔子葬魯城北泗上」とある。また、太史公自序に「年十歲則誦古文。二十而南游江、淮、上會稽、探禹穴、闢九疑、浮於沅、湘、北涉汶、泗、講業齊、魯之都、觀孔子之遺風、鄉射鄒、嶧、扈困鄆、薛、彭城、過梁、楚以歸。」と見え、「禹穴」について、裴駟『集解』の引く張晏の言に「禹巡狩至會稽而崩、因葬焉。上有孔穴、民間云禹入此穴。」とある。また、「禹穴」を書物収蔵の地とし

て伝える記述としては、『太平御覽』地部会稽山の条に『九土文括略』を引いて、「禹禪此山、有一石穴委曲、黃帝藏書於此、禹得之。」とある。また、李白「送二季之江東」詩に「禹穴藏書地、匡山種杏田」とあり、その王琦注に、「賀知章『纂山記』曰、『黃帝號宛委穴爲赤帝陽明之府、於此藏書。大禹始於此穴得書、復於此穴藏之、人因謂之禹穴。』」と述べる。

卷二

補校漢藝文志第十

鄭樵誤校漢志第十一

焦竑誤校漢志第十二

補校漢藝文志「」第十

【原文】

鄭樵「校讎」諸論、於『漢志』尤所疎略、蓋樵不取班氏之學故也。然班、劉異同、樵亦未嘗深考、但譏班固續入揚雄一家、不分倫類而已^{〔一〕}。其劉氏遺法、樵固未嘗討論、而班氏得失、樵議亦未得其平允。夫劉『略』班『志』、乃千古著錄之淵源、而樵著「校讎」之略、不

免疎忽如是。蓋創始者難爲功爾。今欲較正諸家著錄、當自劉『略』班『志』爲權輿也。

右十之一

【訓読文】

鄭樵の「校讎」の諸論、『漢志』に於いて尤も疎略なる所なり、蓋し樵の班氏の学を取らざるの故ならん。然らば班、劉の異同、樵亦た未だ嘗て深く考えず、但だ班固の統^つぎて揚雄一家を入れ、倫類を分かつたざるを譏るのみ。其れ劉氏の遺法、樵は固より未だ嘗て討論せず、而して班氏の得失、樵の議は亦た未だ其の平允を得ず。夫れ劉『略』班『志』は、乃ち千古の著録の淵源なり、而るに樵「校讎」の略を著して、疎忽を免れざることは是くの如し。蓋し創始する者は功を為し難きのみ。今諸家の著録を較正せんと欲すれば、當に劉『略』班『志』自り權輿と爲すべきなり。

右十の一

【現代語訳】

鄭樵が「校讎略」の諸論で、班固の『漢書』芸文志

をとりわけ軽視しているのは、思うに、鄭樵が班固の学問を取り入れなかったためであろう。そのために班固と劉歆の相違について、鄭樵は深く考えもせず、班固が（劉歆の事業を）継承しながら揚雄の書物を一括して著録し、各々の著述に対して類別を加えていないことを批難するのである。劉歆の遺した編纂方法について、鄭樵はもとより検討を加えておらず、班固の得失すら、鄭樵は議論しているとは言っても、それは公平で妥当なものとは言いがたい。そもそも劉歆の『七略』と班固の『漢書』芸文志は、とりもなおさず千古以来目録の淵源であり、鄭樵が「校讎略」を著していないが、粗忽を免れていないのはこの通りである。思うに、物事を創始するということは功績を収め難いものである。今諸家の目録を校正しようとするならば、劉歆の『七略』と班固の『漢書』芸文志から始めなければならない。

以上十の一

【訳注】

一 『校讎通義』巻二に収録される「補校漢藝文志」につい

て、王重民は、「這一條是這一章、也是後兩卷（卷二、卷三）的小序。『校讎通義』的一卷專論目錄學的一般方法理論的、卷二卷三是專就『漢書』藝文志申明目錄學方法、理論。並評論我國古代目錄學得失的、章學誠撰『校讎通義』批判地繼承了『通志』校讎略的方法理論、所以在這一條裏專論鄭樵的『校讎』諸論。」と述べている。これまで章学誠は主として目錄學の淵源やその変遷、あるいは書誌分類における理論・方法などについて論じきた。章学誠は本章において鄭樵の「校讎略」の議論に基づき、班固『漢書』藝文志にみられる劉歆『七略』の大例や規則を明らかにし、また、『漢書』藝文志における尊重すべき点、そして不備な点を補い校していく。鄭樵の「校讎略」の議論に基づくという点に関して、『校讎通義』のより古い体裁を保つものとされる内藤本（井上進「内藤湖南藏本文史校讎通義記略」『東方學四十年記念論集』所収）では、卷二の総題として「續通志校讎略擬稿第二」とあり、副題として「補校漢志藝文論」と題されていたということも、章学誠の意図する源流を考える上で重要な示唆を含んだものであろう。

章学誠は本条において、鄭樵の議論に対して極めて批判的な立場から論及を始めているが、彼と鄭樵の目錄學の立場には、やはり類似している点も見られる。例えば、鄭樵は「校讎略」の「編次必謹類例論」において、「學之不專者、爲書之不明也。書之不明者、爲類例之不分也。有專門之書則有專門之學、有專門之學則有世守之能。人守其學、

學守其書、書守其類、人有存沒而學不息、世有變故而書不亡……士卒之亡者、由部伍之法不明也。書籍之亡者、由類例之法不分也。類例分則百家九流各有條理、雖亡而不能亡也。」（自序「注四」）などと述べているように、書物の分類を最も重視する一方で、『崇文總目』における書誌解題を糾弾したことは、夙によく知られる所であろう（宗劉「二之人」注二）。この点に関しては章学誠にあつても通じることであり、書誌分類の実践的な方法を詳述する一方で、書誌解題の重要性について、「宗劉」篇の「二之人」で認めてはいるものの、具体的な方法などはあまり述べておらず、その意味において書誌解題に対する関心はやや希薄な傾向にあるものと考えられる。このことはまた、章学誠が後世の目錄學者に批判される所でもある（自序「注二」）。しかし、これこそ章学誠が鄭樵の主張する書物の分類の重要性に共感した証であり、鄭樵の學術をより精緻なものにしようとした顕現なのであろう。『校讎通義』に冠された自序で次のように述べている。「鄭樵生千載而後、慨然有會於向歆討論之旨、因取歷朝著録、略其魚魯亥亥之細、而特以部次條別、疏通倫類、考其得失之故而爲之校讎、蓋自石渠天祿以還、學者所未嘗窺見者也。」

また、王重民は本条について次のように述べている。「這一章是在卷一的九章通論以後、開始專門評論『漢書』藝文志的第一章、因此、這一章對於後面的八章來說、所討論的都是屬於『漢書』藝文志的原則問題。在這一章內、章学誠

運用自己的目録學方法、理論。在鄭樵『校讎略』的基礎上、提出了許多重要問題。」

以下に「漢志」の略類、及びその下位分類と著述の総数を「漢志」の記載に従って掲げておく。適宜参照されたい。

①六芸略

易 十三家・二百九十四篇

書 九家・四百一十二篇

詩 六家・四百一十六卷十二篇

礼 十三家・五百五十五篇

楽 六家・百六十五篇

春秋 二十三家・九百四十八篇

論語 十二家・二百二十九篇

孝經 十一家・五十九篇

小学 十家・四十五篇

儒家 五十三家・八百三十六篇

道家 三十七家・九百九十三篇

陰陽家 二十一家・三百六十九篇

法家 十家・二百一十七篇

名家 七家・三十六篇

墨家 六家・八十六篇

縱横家 十二家・百七篇

雑家 二十家・四百三篇

農家 九家・百一十四篇

小説家 十五家・千三百八十篇

(計) 百八十九家・四千三百二十四篇

③詩賦略

屈原賦 二十家・三百六十一篇

陸賈賦 二十一家・二百七十四篇

荀卿賦 二十五家・百三十六篇

雜賦 十二家・二百三十三篇

歌詩 二十八家・三百一十四篇

(計) 百六家・千三百一十八篇

④兵書略

兵權謀 十三家・二百五十九篇

兵形勢 十一家・九十二篇・四十八卷

兵陰陽 十六家・二百四十九篇・四十八卷

兵技巧 十三家・百九十九篇

(計) 五十三家・七百九十篇・四四十三卷

⑤数術略

天文 二十一家・四百四十五卷

曆譜 十八家・六百六卷

五行 三十一家・六百五十二卷

著龜 十五家・四百一卷

雜占 十八家・三百一十三卷

形法 六家・百二十二卷

(計) 百九十家・二千五百二十八卷

⑥方技略

医經 七家・二百一十六卷

經方 十一家・二百七十四卷

房中 八家・百八十六卷。

神仙 十家・二百五卷

(計) 三十六家・八百六十八卷

(総計) 六略三十八種・五百九十六家・万三千二百六十九卷
 二 鄭樵は「校讎略」の「編次不明論」で次のように述べている。「班固藝文志、出於『七略』者也。『七略』雖疎而不濫、若班氏步步趨趨、不離於『七略』、未見其失也。間有『七略』所無而班氏雜出者、則蹟矣。楊雄所作之書、劉氏蓋未收、而班氏始出、若之何以『太玄』『法言』『樂箴』三書合爲一總、謂之楊雄所序三十八篇入於儒家類。按儒者舊有五十二種、固新出一種、則楊雄之三書也。且『太玄』易類也、『法言』諸子也、『樂箴』雜家也、奈何合而爲一家。是知班固胸中元無倫類。」なお、章氏が「蓋樵不取班氏之學故也」とするのは、自序で「樵書首譏班固、凡所推論、有涉於班氏之業者、皆過爲駁之辭。蓋樵爲通史、而固則斷代爲書、兩家宗旨、自昔殊異、所謂道不同不相爲謀、無足怪也。」と述べているように、班固が断代史を取る一方で、鄭樵は通史を信じていたように、史学者としての立場がもともと異なるものであったことを述べている(自序注六)。

【原文】

鄭樵以蕭何『律令』^{〔一〕}、張蒼『章程』^{〔二〕}、劉『略』^{〔三〕}班『志』不收、以爲劉、班之過^{〔四〕}。此劉氏之過、非班氏之過也。劉向校書之時、自領六藝、諸子、詩賦三略、蓋出中祕之所藏也。至於兵法、術數、方技、皆分領於

專官^{〔五〕}。則兵、術、技之三略、不盡出於中祕之藏、其書各存專官典守。是以劉氏無從而部錄之也。惟是申、韓家言、次於諸子、仲舒『治獄』、附於『春秋』^{〔六〕}。不知『律令』藏於理官^{〔七〕}、『章程』存於掌故^{〔八〕}、而當時不責成於專官典守^{〔九〕}、校定篇次、是『七略』之遺憾也。班氏謹守劉『略』遺法、惟出劉氏之後者、間爲補綴一二^{〔一〇〕}。其餘劉氏所不錄者、東京未必盡存、『藝文』佚而不載、何足病哉。

右十之二

【訓読文】

鄭樵は蕭何の『律令』、張蒼の『章程』、劉『略』班『志』の收めざるを以て、以て劉、班の過と爲す。此れ劉氏の過にして、班氏の過に非ざるなり。劉向は校書の時、自ら六芸、諸子、詩賦の三略を領ぶ^ナ、蓋し中祕の藏する所に出づるなり。兵法、術數、方技に至りては、皆な分けて專官に領べしむ、則ち兵、術、技の三略、尽くは中祕の藏に出でずして、其の書各々專官典守に存す。是を以て劉氏は従りて之を部録する無きなり。惟だ是れ申、韓の家言は、諸子に次べ、仲舒の

『治獄』は、春秋に付す。『律令』は理官に蔵し、『章程』は掌故に存するを知らず、当時 専官典守に責成し、篇次を校定せざるは、是れ『七略』の遺憾なり。班氏謹しみて劉『略』の遺法を守り、惟だ劉氏の後に出づる者、間々補綴を為すこと一二なるのみ。其の余劉氏の録せざる所、東京 未だ必ずしも尽くは存せず、『芸文』佚して載せざるも、何ぞ病とするに足らんや。

右十の二

【現代語訳】

鄭樵は蕭何の『律令』と張蒼の『章程』の著述を、劉歆『七略』と班固『漢書』芸文志に収録されていないことを理由に、劉歆、班固の過失としている。しかしこれは劉歆の過失であつて、班固の過失ではない。劉向は校書事業の際に、自身で六芸、諸子、詩賦の三略を担当したのであり、思うに、宮中の蔵書に基づいたのであろう。一方で兵法、術数、方技の類は、各々分担して専官によつて担当させており、兵法、数術、方技の三略の書物は、宮廷に所蔵されるものがそのすべてではなく、その書物は各々専官の蔵室にも保存さ

れているのである。そのために劉歆は自身で分類して著録する術がなかったのである。唯一、申不害と韓非一家の学問が、諸子略に並べられ、董仲舒の『治獄』が、春秋略に添えられているばかりである。そもそも『律令』は理官に所蔵され、『章程』は掌故に保存されていることを把握しておらず、当時の専官の責任者に成果を挙げるように要求し篇次を校定させていないのは、『七略』における遺憾である。班固は謹んで劉歆の『七略』の遺した方法を遵守しており、ただ劉歆より後世に行われた書物に関して、時折一つや二つ補っているだけである。その他に劉歆によつて著録されていないものは、後漢にはもはや必ずしもすべて残っていないわけでもなかったのであれば、『漢書』芸文志で漏らして著録されずとも、どうして欠点とする必要があるうか。

以上十の二

【訳注】

一 蕭何の伝は『史記』蕭相国世家に詳しい。『律令』はすなわち「九章律」、中国漢代に行われた法典で、盗律、賊律、

囚律、捕律、雜律、具律、戸律、興律、廨律を指しており、蕭何が李悝『方經』六篇に基づき作製したという(『アジア歴史事典』二)平凡社、一九八四年、滋賀秀三参照)。「漢書」刑法志・刑篇には、「漢興、高祖初入關、約法三章曰、殺人者死、傷人及盜抵罪。蠲削煩苛、兆民大説。其後四夷未附、兵革未息、三章之法不足以禦姦、於是相國蕭何摯摭秦法、取其宜於時者、作律九章。」とあり、「漢志」六芸略・小学類には、「漢興、蕭何草律、亦著其法、曰、太史試學童、能諷書九千字以上、乃得爲史。又以六體試之、課最者以爲尚書御史書令史。吏民上書、字或不正、輒舉劾。」とある。

二 張蒼も蕭何と同じく秦末から前漢を生きた政治家。『漢書』張蒼伝に拠ると、「是時蕭何爲相國、而蒼乃自秦時爲柱下御史、明習天下圖書計籍、又善用算律曆、故令蒼以列侯居相府、領主郡國上計者。」とあるように、算術、曆数を善くした。『章程』は『漢書』本紀・劉邦の「張蒼爲章程」に如淳は、「章、曆數之章術也。程者、權衡丈尺斛斗之平法也。」と注しているように、曆や度量衡の基準を定める法式である。

三 鄭樵の「校讎略」で本条と関わるものを掲げれば次の通りである。

「亡書出於後世論」

古之書籍、有不出於當時、而出於後代者。按蕭何『律令』、張蒼『章程』、漢之大典也、劉氏『七略』、班固『漢志』全不收。按晉之故事即漢章程也、有『漢朝駁議』三十卷、『漢

名臣奏議』三十卷、並爲章程之書、至隋、唐猶存、奈何闕於漢乎。刑統之書本於蕭何律令、歷代增修、不失故典、豈可闕於當時乎。又況兵家一類、任宏所編、有韓信『軍法』三篇、『廣武』一篇、豈有韓信『軍法』猶在、而蕭何『律令』、張蒼『章程』則無之、此劉氏、班氏之過也。孔安國『舜典』不出於漢而出於晉、連山之『易』不出於隋而出於唐。應知書籍之亡者、皆校讎之官失職也。

「見名不見書論」

按『漢朝駁議』『諸王奏事』『魏臣奏事』『魏臺訪議』『南臺奏事』之類、隋人編入刑法者、以隋人見其書也。若不見其書、即其名以求之、安有刑法意乎。按『唐志』見其名爲奏事、直以爲故事也、編入故事類。況古之所謂故事者、即漢之章程也、異乎近人所謂故事者矣、是之謂見名不見書。按『周易參同契』三卷、『周易五相類』一卷、爐火之書也、『唐志』以其取名於『周易』、則以爲卜筮之書、故入『周易』卜筮類、此亦謂見名不見書。

なお、鄭樵のこれらの言及は「十之八」注一及び注四に掲げた「隋志」史部・刑法篇と史部・旧事篇の篇序に基づくものと思われる。併せて参照されたい。

四

「漢志」序文に「詔光祿大夫劉向校經傳諸子詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍醫李柱國校方技。」とあるのに基づく。

五

「漢志」諸子略・法家類に「申子六篇」「韓子五十五篇」が著録され、六芸略・春秋類に「公羊董仲舒治獄十六篇」

が著録されている。

六 「漢志」諸子略・法家に「法家者流、蓋出於理官、信賞

必罰、以輔禮制。『易』曰、先王以明罰飭法、此其所長也。

及刻者爲之、則無教化、去仁愛、專任刑法而欲以致治、至

於殘害至親、傷恩薄厚。」とあり、また『漢書』礼樂志で

は、「今叔孫通所撰『禮儀』、與律令同錄、臧於理官、法家

又復不傳。」とあり、これについて顔師古は、「理官、即法

官也。」と注している。また『礼記』月令には、「理、治獄

官也。」とあるように、官職を指している。

七 「掌故」は故事を掌る役職。『漢書』劉歆伝には、「至孝

文皇帝、始使掌故朝錯、從伏生受『尚書』。」とあり、李奇

は「掌故、官名也。」と注している。また、章氏は「十之

八」で「後世故事之書甚多、不特張蒼所次『章程』而已也。」

と述べているように、「掌故」によつて掌られる「故事」

の著述として『章程』を考えている。なお、『章程』を掌

故に保存しているとするのは、鄭樵の「晉之故事即漢章程」

(本条注三)に基づく。

八 「責成」の語は、『韓非子』外儲說右下に「人主者、守法

責成以立功者也。」と見える。

九 「漢志」六芸略・書類に「凡書九家、四百一十二篇」と

あり、それに班固は、「入劉向稽疑一篇。」と注し、それに

対して顔師古は、「此凡言入者、謂七略之外班氏新入之也。」

と注している。六芸略・小学類の班固の注にも「入揚雄、

杜林二家二篇。」とあり、「揚雄蒼頡訓纂一篇」「杜林蒼頡訓

纂一篇」「杜林蒼頡故一篇」が著録されている。他にも諸子
略・儒家類に「入揚雄一家〔三〕十八篇。」とあり、「揚雄
所序三十八篇」が著録される。章氏が「補綴一二」とする
のは、具体的には揚雄と杜林の書物を指している。

【原文】

『漢志』最重學術源流、似有得於太史敘傳〔二〕、及
莊周天下篇、荀卿非十子之意〔原文三〕韓嬰詩傳引荀卿「非
十子」、並無譏子思、孟子之文〔四〕。此敘述著錄〔三〕、所以有
關於明道之要、而非後世僅計部目者之所及也。然立法
創始、不免於疎、亦其勢耳。如『封禪羣祀』入禮經、『太
史公書』入春秋、較之後世別立儀注、正史專門者、爲
知本矣〔四〕。詩賦篇帙多、不入詩經、而自爲一略〔五〕、
則敘例尚少發明其故、亦一病也〔六〕。諸子推本古人官
守〔七〕、當矣。六藝各有專官、而不與發明〔八〕、豈爲博
士之業所誤耶〔九〕。
右十之三

【訓読文】

『漢志』の最も學術の源流を重んずるは、太史の叙

伝、及び莊周の天下篇、荀卿の非十子の意に得る有るに似たり「原注：『韓嬰詩伝』は荀卿「非十子」を引き、並びに子思、孟子を譏するの文無し」。此の著録を叙述するは、明道の要に関する有る所以にして、後世僅かに部目を計うる者の及ぶ所に非ざるなり。然るに法を立つるの創始なれば、疎を免れざること、亦た其の勢なるのみ。『封禪群祀』もて礼経に入れ、『太史公書』もて春秋に入るが如きは、之を後世の別に儀注、正史の専門を立つる者に較ぶれば、本を知れりと為す。詩賦の篇帙繁多にして、詩経に入れず、而して自ら一略を為せば、則ち叙例に尚お其の故を發明すること少きも、亦た一病なり。諸子の古人の官守を推本するは、当たれり。六芸各々専官有れば、而るに發明に与らず、豈に博士の業の誤る所と為らんや。

右十の三

【現代語訳】

『漢書』芸文志が最も學術の淵源とその変遷を重視している点は、司馬遷の太史公自序、及び莊周の天下篇や荀卿の非十子の趣旨に影響を受けているかのよう

である「原注：『韓詩外伝』は荀卿の「非十子」を引用し、並びに子思、孟子を譏っている文章は無い」。その著録を叙述した記述は、道を明らかにするための枢要に関心が及んでいるためであり、後世のただ書物を数えただけの帳簿が及ぶはずもないのである。しかし初めてその方法を規定したのであれば、粗忽に陥りやすいことも、また致し方ない所である。『封禪群祀』を礼経類に入れて、『太史公書』を春秋類に入れているようなものは、後世、別に儀注や正史の略類を部立していることに比べれば、學術の淵源をよく理解している。詩賦の著述は書籍の篇巻が繁り多かつたために、詩経類には入れずに、一略を部立したのであれば、叙例に學術の淵源について余り説明していないことは、一つの欠点である。諸子略の古代官守の淵源に対する探求は、当を得ている。六芸略にもそれぞれに専官が存在していたが、その(古代官守の淵源のことの)説明を施しておらず、それはまったく博士らの(學術の淵源や変遷を軽んじて一字一句の解釈に数万言のことばを費やすといった)業によつて誤られたものなのである。

以上十の三

【訳注】

一章氏は「和州志藝文書序例」においても「究劉氏之業、將由班固之書、人知之、究劉氏之業、當參以司馬遷之法、人不知也。夫司馬遷所謂序次六家、條辨學術同異、推究利病、本其家學、尚已。」と述べるように、「漢志」の著録を叙述する篇序のあり方が、司馬遷の叙述のあり方と類似することを指摘している。また、それは「和州志藝文書序例」の「家學」(二之^{注八})に付された自注に「司馬談論陰陽、儒、墨、名、法、道德、以爲六家。」とあるように、司馬遷が父談の業を「家學」として継承したことに拠るものとする。『史記』卷一百三十・太史公自序では次による。「啓學者之不達其意而師悖、乃論六家之要指曰『易大傳』、『天下一致而百慮、同歸而殊塗。』夫陰陽、儒、墨、名、法、道德、此務爲治者也、直所從言之異路、有省不省耳。嘗竊觀陰陽之術、大祥而衆忌諱、使人拘而多所畏。然其序四時之大順、不可失也。儒者博而寡要、勞而少功、是以其事難盡從。然其序君臣父子之禮、列夫婦長幼之別、不可易也。墨者儉而難遵、是以其事不可備循、然其疆本節用、不可廢也。法家嚴而少恩。然其正君臣上下之分、不可改矣。名家使人儉而善失眞。然其正名實、不可不察也。道家使人精神專一、動合無形、瞻足萬物。其爲術也、因陰陽之大順、采儒墨之善、撮名法之要、與時遷移、應物變化、立俗施事、無所不宜、指約而易操、事少而功多。」また、章氏が指摘する『莊子』『荀子』の例の他に『呂氏春秋』二篇、『淮

南子』要略篇などが挙げられる。

二 自注に引く「韓嬰」は「漢書」儒林伝に「韓嬰、燕人也。孝文時爲博士、景帝時至常山太傅。嬰推詩人之意、而作內外傳數萬言、其語頗與齊、魯間殊、然歸一也。」とある。

「漢志」では六芸略・詩類に「韓外傳六卷」とある。「荀子」非十二子篇において批判の対象となっているのは、「它蠶」

「魏牟」「陳仲」「史籀」「墨翟」「宋鉞」「慎到」「田駢」「惠施」「鄒析」「子思」「孟子」の十二子であるが、『韓詩外傳』

では「子思」「孟子」を除いた十子を対象としており、章氏はこれに従っている。章氏が『荀子』の「十二子」を採らずに『韓詩外傳』の「十子」を採ったのは、例えば王応麟

の『困學記聞』に「荀卿『非十二子』、『韓詩外傳』引之、止云十子、而無子思、孟子。愚謂荀卿非子思、孟子、蓋其

門人如韓非、李斯之流其師說、以毀聖賢。當以『韓詩』爲正。」などであるように、『韓詩外傳』を正文とする先人の

見解に拠るのであろう。参考までに『韓詩外傳』の記述を掲げておく。「此十子者、皆順非而澤、聞見雜博、然而不師

上古、不法先王、按往舊造說、務而自功、道無所遇、二人相從。故曰、十子者之工說、說皆不足合大道、美風俗、治

紀綱。然其持之各有故、言之皆有理、足以欺惑衆愚、交亂

撲鄙、則是十子之罪也。」

三 章氏は「敘述」という語を、『文史通義』卷三「史德」に

「自序以謂『紹名世、正『易傳』、本『詩』、『書』、『禮』樂之際』、其本旨也。所云發憤著書、不過敘述窮愁、而假以爲

辭耳。」と述べ、また、「漢志諸子」の「十四之十」に、「道家源委、『莊子』天下篇所敘述者、略可見矣。」などと用いている。

四 「漢志」では六芸略の札類に、「古封禪羣祀二十二篇」「漢封禪羣祀三十六篇」などが付されているのに対して、「隋志」では史部に儀注類が部立(宗劉「二之」注)され、「漢舊儀四卷」「晉新定儀注四十卷」「晉雜儀注十一卷」などを著録している。「隋志」史部・儀注篇には部立の由来を説いて、「儀注之興、其所由來久矣。自君臣父子、六親九族、各有上下親疏之別。養生送死、弔恤賀慶、則有進止威儀之數。唐、虞已上、分之爲三、在周因而爲五。『周官』『宗伯所掌吉、凶、賓、軍、嘉、以佐王安邦國、親萬民、而太史執書以協事。』之類是也。是時典章皆具、可履而行。周衰、諸侯削除其籍。至秦、又焚而去之。漢興、叔孫通定朝儀、武帝時始祀汾陰后土、成帝時初定南北之郊、節文漸具。後漢又使曹褒定漢儀、是後相承、世有制作。然猶以舊章殘缺、各遵所見、彼此紛爭、盈篇滿牘。而後世多故、事在通變、或一時之制、非長久之道。載筆之士、刪其大綱、編于史志。而或傷於淺近、或失於未達、不能盡其旨要。遺文餘事。亦多散亡。今聚其見存、以爲儀注篇」と述べている。なお、「漢封禪羣祀三十六篇」について、葉德輝は、『史記』封禪書・正義引『五經通義』云、「易姓而王、致太平、必封泰山、禪梁父、荷天命以爲王、使理羣生、告太平於天、報羣神之功。」據此、則古有封禪羣祀之禮。」と述べている。

五 『史記』は「漢志」では六芸略・春秋類に著録され、「隋志」では史部・正史類に著録されている。章氏は「宗劉」の「二之一」で、『七略』之流而爲四部、如篆隸之流而爲行楷、皆勢之所不容已者也。史部日繁、不能悉隸以春秋家學、四部之不能返『七略』者。」(宗劉「二之」注)と述べているように、「七略」の六部分類から後世主要となった四部分類に至る変遷に關して、史書の類が日々に繁り「七略」に返り得なくなつたことは時代の趨勢であり、やむを得ないものとする。その一方で『史記』の淵源を春秋家に顧みることが、彼自身が「二之二」の冒頭で、「二十三史、皆春秋家學也……故劉歆次『太史公』百三十篇於春秋之後班固敘例亦云、作春秋考紀十二篇、明乎其繼春秋而作也。」(宗劉「二之」注)と述べている通りであり、「漢志」で『史記』がその淵源である春秋類に付されているという点を、章氏は「漢志」における評価すべき一側面としているのである。また、「漢志」で既に詩賦略が独立して部立されていることについて、「篇帙繁多」とするのは、春秋家が「二十三家九百四十八篇」足らずであるのに比較して、詩賦略の屈原賦、陸賈賦、孫卿賦、雜賦、歌詩が併せて「詩賦百六家、千三百一十八篇」と多大であるように、著述の多寡に拠つて分類されていることをある程度許容する認識があるのであらう。なお、余嘉錫は『目錄學發微』の「目錄類之沿革」の中で「漢志」の分類の基準が書物の多寡であることを詳細に論じている。章氏は著述の量によつて分類が

定まることはやむを得ないが、本来収めるべき略類から、分類を変更するのであれば、目録上で明確に示すべきことを主張するのである。また、阮孝緒の「七録序」では、「劉王並以衆史合于春秋。劉氏之世史書甚寡。附見春秋誠得其例。今衆家記傳倍於經典。猶從此志。實爲繁蕪。且『七略』詩賦不從六藝諸部。蓋由其書既多。所以別爲一略。今依擬斯例分出衆史。序記傳錄爲內篇第二。」と述べている。

六 章氏は「原道」「一之三」において、「劉歆『七略』、班固刪其輯略而存其六。顏師古曰、『輯略謂諸書之總要。』蓋劉氏討論羣書之旨也。此最爲明道之要、惜乎其文不傳。今可見者、唯總計部目之後、條辨流別數語耳。即此數語窺之、劉歆蓋深明乎古人官師合一之道、而有以知乎私門初無著述之故也。何則、其敍六藝而後、次及諸子百家、必云、某家者流、蓋出古者某官之掌、其流而爲某氏之學、失而爲某氏之弊。」と述べているように、著述の總計後に置かれる篇序、及び總序を劉歆『七略』の逸文と考えている（「原道」「一之三」注一）。例えば「漢志」詩賦略の總序には、「傳」曰、「『不歌而誦謂之賦、登高能賦可以爲大夫』言感物造端、材知深美、可與圖事、故可以爲列大夫也。古者諸侯卿大夫交接鄰國、以微言相感、當揖讓之時、必稱詩以諭其志、蓋以別賢不肖而觀盛衰焉。故孔子曰『不學詩、無以言也』春秋之後、周道浸壞……自孝武立樂府而采歌謠、於是有代趙之謳、秦楚之風、皆感於哀樂、緣事而發、亦可以觀風俗、知薄厚云。〔序〕詩賦爲五種。」などとあるように、歴史的な

変遷を説いてはいるが、詩賦略の部立の由来を説いてはいない。

七 「漢志」諸子略に付された篇序に「儒家者流、蓋出於司徒之官」「道家者流、蓋出於史官」（「原道」「一之三」注三）などある。章氏はこれらの古代職官に対する論及についての射たものと評価しているのである。

八 章氏の六芸に対する認識は「原道」「一之二」の冒頭で、「六藝非孔氏之書。『易』掌太卜、『書』藏外史、『禮』在宗伯、『樂』隸司樂、『詩』領於太師、『春秋』存乎國史」（「一之二」注二）と主張するように、古代にもそれぞれ専門の官職が存在していたものと考えている。しかし例えば「漢志」六芸略・書類の篇序では、『易』曰、「河出圖、雒出書、聖人則之。」故『書』之所起遠矣……『書』者、古之號令、號令於衆、其言不立具、則聽受施行者弗曉。古文讀應『爾雅』、故解古今語而可知也。」とあり、詩類の篇序では、『書』曰、「詩言志、歌詠言。」……故古有采詩之官、王者所以觀風俗、知得失、自考正也。」などとあるばかりで、古代專官に関する記載は諸子略に比べてあまり詳しくは見られない。九 「漢志」六芸略の總序に「後世經傳既已乖離、博學者又不思多聞闕疑之義、而務碎義逃難、便辭巧說、破壞形體。說五字之文、至於二三萬言。後進彌以馳逐、故幼童而守一藝、白首而後能言。安其所習、毀所不見、終以自蔽。此學者之大患也。」とあるように、当時の學者らが、一字一句の解釈に終始し、まず探求すべき學術の淵源・変遷に関心

のないことを識っているのであろう。

【原文】

形而上者謂之道、形而下者謂之器^{〔一〕}。善法具舉「原注」：「徒善徒法、皆一偏也」^{〔二〕}、本末兼該、部次相從、有倫有脊^{〔三〕}、使求書者可以卽器而明道、會偏而得全、則任宏之校兵書^{〔四〕}、李柱國之校方技、庶幾近之^{〔五〕}。其他四略、未能稱是。故劉『略』班『志』、不免貽人以口實也^{〔六〕}。夫兵書略中『孫』『吳』諸書^{〔七〕}、與方技略中內外諸經^{〔八〕}、卽諸子略中一家之言、所謂形而上之道也。兵書略中形勢、陰陽、技巧三條、與方技略中經方、房中、神仙三條、皆著法術、名數、所謂形而下之器也。任、李二家、部次先後、體用分明、能使不知其學者、觀其部錄、亦可瞭然而窺其統要、此專官守書之明效也。充類求之、則後世之儀注、當附禮經爲部次、『史記』當附春秋爲部次^{〔九〕}。縱使篇帙多、別出門類、亦當申明敍例。俾承學之士、得考源流、庶幾無憾。而劉、班承用未精、後世著錄、又未嘗探索其意、此部錄之所以多舛也。

右十之四

【訓読文】

形而上なる者、之を道と謂い、形而下なる者、之を器と謂う。善法、具さに挙げ「原注：徒善徒法、皆な一偏なり」、本末兼該し、部次相い従い、倫有り脊有り、書を求むる者をして以て器に即きて道を明らかにさせ、偏に会するも全きを得べからしむれば、則ち任宏の兵書を校し、李柱國の方技を校するに、庶幾^{ほとんど}之に近からん。其の他の四略、未だ是と称すること能わず。故に劉『略』班『志』は、人に貽らる口實を以てするを免れざるなり。夫れ兵書略中の『孫』『吳』の諸の書と、方技略中の『内』『外』諸の經とは、即ち諸子略中の一家の言なり、所謂の形而上の道なり。兵書略中の形勢、陰陽、技巧の三条と、方技略中の經方、房中、神仙の三条とは、皆な法術、名数を著す、所謂の形而下の器なり。任、李二家、部次先後にして、体用分明なり、能く其の学を知らざる者をして、其の部録を觀しめば、亦た瞭然として其の統要を窺うべからしむ、此れ專官の書を守るの明效なり。類を充てて之を求むれば、則ち後世の儀注は、當に礼經に付して部次を爲すべし、『史記』は當に春秋に付して部次を爲すべし。縱^{たと}使い

篇帙繁多にして、別に門類を出だすも、亦た当に叙例に申明すべし。承学の士をして、源流を考うるを得しむれば、憾み無きに庶幾からん。而して劉、班の承用すること未だ精ならず、後世の著録も、又未だ嘗て其の意を探索せず、此れ部録の多舛なる所以なり。

右十の四

【現代語訳】

形而上なるものを道と言い、形而下なるものを器と言う。有益な方法はすべて取り挙げて「原注…実効の伴わない善良な心や空疎で形ばかりの法は、全て偏ったものである」、根本から枝葉に至るまで委細に涉つて包括し、分類とその配列のあり方が互いに寄り添っているながら、それでいて道理を保ち、書物を探し求める者が器に接すればその道を明らかにさせ、辺境に行きあつても全体を悟り得させるとすれば、すなわち任宏が兵書略を校訂し、李柱国が方技略を校訂したものこそ、殆どこれに近いものである。その他の四略については、このように讃えることは出来ない。そのために劉歆『七略』と班固『漢書』芸文志は、人々の語り種となることを免

れられないのである。そもそも兵書略中の『孫子』や『呉起』など諸々の書物と、方技略中の諸々の『内経』や『外経』などは、諸子略中の一家の言に相当し、いわゆる形而上の道である。兵書略中の形勢類、陰陽類、技巧類の三条と、方技略中の経方類、房中類、神仙類の三条は、すべて法術、名数の著述を著し、いわゆる形而下の器である。任宏、李柱国の二家は、分類と配列、その順序において、本体とその作用がはっきりと示されており、兵書や方技の学問を修めていない者であっても、その部録を見せてみれば、一目瞭然にしてその系統と枢要を窺わせるのであり、これこそ専官が書物を司ることによる卓越した効用である。さて、この例に照らして追究してみれば、後世に部立された儀注類は、(その淵源を理解させるために)やはり礼経類に添えて配列すべきであり、『史記』は春秋類に添えて配列すべきである。たとえ書籍の篇巻が繁り多くなつたという理由から、別に一略を部立するのであつても、叙例にその所以を伸べ明らかにしなければならぬ。学問に従事するものが、學術の淵源とその変遷を考究し得るようにすれば、遺憾な点はほぼ無いと言えるだろ

う。劉歆と班固は專官の成果を充分に利用しておらず、後世の著録においても、その意義を探索していなことが、部録の中で多く叛き乱れている原因である。

以上十の四

【訳注】

一 『易』繫辭上に「乾坤成列、而『易』立乎其中矣。乾坤毀、則无以見『易』。『易』不可見、則乾坤或幾乎息矣。是故、形而上者謂之道、形而下者謂之器。」とあり、孔穎達疏に「是故形而上者謂之道、形而下者謂之器者、道是无體之名、形是有質之稱。凡有從无而生、形由道而立、是先道而後形、是道在形之上、形在道之下。故自形外已上者謂之道也、自形内而下者謂之器也、形雖處道器兩畔之際、形在器、不在道也。既有形質、可爲器用、故云形而下者謂之器也。」とあるのに基づく(原道「一之」注一)。

二 『孟子』離婁上に「孟子曰、離婁之明、公輸子之巧、不以規矩、不能成方員。師曠之聰、不以六律、不能正五音。堯舜之道、不以仁政、不能平治天下。今有仁心仁聞、而民不被其澤、不可法於後世者、不行先王之道也。故曰徒善不足以為政、徒法不能以自行。」とあり、趙岐注に「但有善心而不行之、不足以爲政。但有善法度而不施之、法度亦不能獨自行也。」とあるのに基づく。

三 『詩經』小雅・節南山之什の「正月」篇に「維號斯言、

有倫有脊。」とあり、毛伝に「倫、道。脊、理也。」とあるのに基づく。

四 「漢志」兵書略・兵技巧類の篇序に「武帝時、軍政楊僕摺撫遺逸、紀奏兵錄、猶未能備。至于孝成、命任宏論次兵書爲四種。」とある。

五 鄭樵の「校讎略」の「編書不明分類論」では次のようにある。『七略』惟兵家一略任宏所校、分權謀、形勢、陰陽、技巧爲四種書、又有圖四十三卷、與書參焉。觀其類例、亦可知兵、況見其書乎。其次則尹咸校數術、李柱國校方技、亦有條理。惟劉向父子所校經傳、諸子、詩賦、冗雜不明、盡採語言、不存圖譜、緣劉向章句之儒、胸中元無倫類。班固不知其失、是故後世亡書多、而學者不知源別。凡編書惟細分難、非用心精微、則不能也。兵家一略極明、若他略皆如此、何憂乎斯文之喪也。」

六 『尚書』商書の仲虺之誥に「予恐來世、以台爲口實。」とあるのに基づく。

七 「漢志」兵書略は、兵權謀、兵形勢、兵陰陽、兵技巧の順序で並べられており、そのはじめに置かれる兵權謀類には、後世諸子百家の一つとして数えられもする「吳孫子兵法八十二篇」「齊孫子八十九篇」「吳起四十八篇」などが著録され、その篇序に「權謀者、以正守國、以奇用兵、先計而後戰、兼形勢、包陰陽、用技巧者也。」とあるように、章氏が「道」とする兵權謀類の篇序に、章氏が「器」とする形勢、陰陽、技巧を包括するものとして説明されている。

八 章氏が「漢志」方技略において「道」とする医経類には

「黄帝内經十八卷」「外經三十〔七〕卷」「扁鵲内經九卷」「外經十二卷」などが著録され、「器」とする経方類には「五藏六府痺十二病方三十卷」「秦始黄帝扁鵲俞拊方二十三卷」など、房中類には「容成陰道二十六卷」「三家内房有子方十七卷」など、神仙類には「宓戲雜子道」二十篇」「上聖雜子道二十六卷」などがあり、その総序に「方技者、皆生生之具、王官之一守也。」とあるように、全ての略類で同じ系統の著述を収録していることが述べられている。章氏は医経類の著述を学術の淵源である「道」とし、そこから派生した「器」として、経方や房中を捉えているのである。なお、鄭樵は「校讎略」の「編次不明論」で次のように述べている。『漢志』於醫術類有經方、有醫經、於道術類有房中、有神仙、亦自微有分別。奈何後之人更不本此、同爲醫方、同爲道家者乎。足見後人之苟且也。」

九 本章「十之三」の注三、及び注四を参照。

【原文】

或曰、兵書、方技之部次、既以專官而能精矣。術數亦領於專官、而謂不如彼二略。豈太史尹咸之學術、不逮任宏、李柱國耶^二。答曰、此爲劉氏所誤也。術數一略、分統七條、則天文、曆譜、陰陽、五行、著龜、雜占、

形法是也^三。以道器合一求之、則陰陽、著龜、雜占三條、當附易經爲部次^四。曆譜當附春秋爲部次^五、五行當附尚書爲部次^六。縱使書部浩繁、或如詩賦浩繁、離詩經而別自爲略^七、亦當申明源委於敍錄之後也。乃劉氏既校六藝、不復謀之術數諸家、故尹咸無從溯源流也。至於天文、形法^八、則後世天文、地理之專門書也^九。自立門類、別分道法、大綱既立、細目標分、豈不整齊而有當乎。

右十之五

【訓読文】

或るひと曰く、「兵書、方技の部次、既に專官を以て而して能く精なり。術數も亦た專官に領べらるるも、而るに彼の二略に如かずと謂う。豈に太史尹咸の學術、任宏、李柱國に逮ばざらんや。」と。答えて曰く、「此れ劉氏の誤る所と爲るなり。術數の一略、分けて七条を統ぶ、則ち天文、曆譜、陰陽、五行、著龜、雜占、形法是れなり。道器合一を以て之を求むれば、則ち陰陽、著龜、雜占の三条は、當に易經に付して部次を爲すべし、曆譜は當に春秋に付して部次を爲すべし、五

行は当に尚書に付して部次を為すべし。縦^{たと}使い書部浩繁にして、或いは詩賦の浩繁にして詩経を離れて而して別に自ら略を為すが如くするも、亦た当に源委を叙録の後に申明すべきなり。乃ち劉氏は既に六芸を校して、復た之を術数諸家と謀らず、故に尹咸は従りて源流に溯ぼること無きなり。天文、形法に至りては、則ち後世の天文、地理の門を専らにする書なり。自ら門類を立て、別に道法を分くれば、大綱既に立ち、細目分標、豈に整齊にして当有らざらんや。」と。

右十の五

【現代語訳】

ある人は次のように言った、「兵書略や方技略における分類とその配列のあり方は、専門の官職に治められていて頗る精確である。数術略もまた専門の官職によって担当されているが、彼の二略には及ばないと言われる。どうして太史尹咸の学術は、任宏や李柱国に及ばないのであろうか。」と。これに対して次のように答えた、「これは(もとを辿れば)劉歆によって誤られたのである。数術略は七条に類別して統べられており、す

なわち天文類、曆譜類、陰陽類、五行類、著龜類、雜占類、形法類がそれである。道と器を一つに合せて考究してみれば、陰陽類、著龜類、雜占類の三条は、易经類に添えて分類・配列すべきであり、曆譜類は春秋類に添えて分類・配列すべきであり、五行類は尚書類に添えて分類・配列すべきである。たとえ書籍の部数が繁雑となったとしても、或いは詩賦類のように繁雑であるという理由で詩経類から分離してわざわざ一略を立てたとしても、その顛末を叙録の後に伸べ明らかにしなければならぬ。しかし劉向はもはや六芸を校訂し終えて、再び数術の諸家と検討することもなく、そのために尹咸は学術の淵源に遡る術が無かったのである。また、天文類や形法類の著述については、後世の(別の分類として認識される)天文と地理の専門の著作である。自身で略類を打ち立てて、道理や法則を区別すれば、大本は築き上げられ、細目もはつきりと分かれるのであり、どうして整然として当を得ないことがあろうか。」と。

以上十の五

【訳注】

一 「十之四」の注五で挙げた鄭樵の「編書不明分類論」では、「其次則尹咸校數術、李柱國校方技、亦有條理。」とあるように、鄭樵は尹咸と李柱國の學術を任宏の兵書略に次ぐものとして評価している。

二 章氏は「分統七條」としているが、「漢志」では「陰陽」を除いた「天文」「曆譜」「五行」「著龜」「雜占」「形法」の六つである。王重民は、「沒有陰陽、應該說錯了。」としつつ、『章氏遺書外第』卷七の「和州志藝文書」の「陰陽、五行、著龜、雜占併合爲一通、名推占之家。」を引用し、「可見這是他的一貫主張、但自己的主張不能更改『漢書』藝文志。」とする。なお、「漢志」で「陰陽」をその名称の中に含んでいる略類として、諸子略・陰陽家の篇序に、「陰陽家者流、蓋出於羲和之官、敬順昊天、歷象日月星辰、敬授民時、此其所長也。及拘者爲之、則牽於禁忌、泥於小數、舍人事而任鬼神。」とあり、兵書略・陰陽類の篇序には、「陰陽者、順時而發、推刑德、隨斗擊、因五勝、假鬼神而爲助者也。」とある。「刑德」は、十二辰と十日、「斗擊」は北斗七星の柄を指し示すもので、星占術の一種。また、六芸略・易類の篇序では、『易』曰、「宓戲氏仰觀象於天、俯觀法於地、觀鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情。」とあり、いずれも天体を観測し、また占術の一種であるという点では『易』に類似した性質を持つ。

三

「漢志」數術略・著龜類の篇序に「著龜者、聖人之所用也。『書』曰、『女則有大疑、謀及卜筮。』『易』曰、『定天下之吉凶、成天下之亹亹者、莫善於著龜。』『是故君子將有爲也、將有行也、問焉而以言、其受命也如響、無有遠近幽深、遂知來物。非天下之至精、其孰能與於此。』」とあり、雜占類の篇序に「雜占者、紀百事之象、候善惡之徵。『易』曰、『占事知來。』衆占非一、而夢爲大、故周有其官。」とある。

四

『周禮』春官大史に「正歲年以序事、頒之于官府及都鄙、頒告朔于邦國。」とあり、『春秋左氏傳』文公元年には、「先王之正時也、履端於始、舉正於中、歸餘於終、履端於始」とあり、同書文公六年では、「閏以正時、時以作事、事以厚生、生民之道、於是乎在矣。」とある。

五

『尚書』洪範篇には、「箕子乃言曰、『我聞在昔、鯀陟洪水、汨陳其五行。帝乃震怒、不畀洪範九疇、彝倫攸斁。鯀則殛死、禹乃嗣興。天乃錫禹洪範九疇、彝倫攸敘。初一日五行。次二曰敬用五事。次三曰農用八政。次四曰協用五紀。次五曰建用皇極。次六曰又用三德。次七曰明用稽疑。次八曰念用庶徵。次九曰嚮用五福、威用六極。一、五行。一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土。水曰潤下、火曰炎上、木曰曲直、金曰從革、土爰稼穡。潤下作鹹、炎上作苦、曲直作酸。從革作辛、稼穡作甘。』」などとある。

六

本章「十之三」注四を参照。

七

章氏は『文史通義』卷一「書教上」の中で「馬遷紹法『春

秋』、而刪潤典謨、以入紀傳。班固承遷有作、而『禹貢』取冠『地理』、『洪範』特志『五行』、而『書』與『春秋』不得合爲一矣。」と述べており、『漢書』の地理志の淵源を『尚書』禹貢とし、五行志の淵源を『尚書』洪範としており、その意味からすれば『漢志』形法類に著録する地理の著述も『尚書』にその淵源を求めるべきものと考えられる。例えば『文史通義』卷六「地志統制」に、「統部之制、封建之世、則有方伯。郡縣之世、則自漢分十三部州。六朝州郡、制度迭改、其統部之官、雖有都督總管諸名、而建府無常。故唐人修五代地志、即『隋志』。不得統部之説、至以『禹貢』九州、畫分郡縣、其弊然也。」とある。

八 「漢志」では地理に關係した著述は術数略・形法類に収録され、『七錄』では、それに相當する略類として技術録に「刑法類」があり、それとは別に紀伝録に「土地部」がみられる(『互著』三之三注二)。「隋志」では、それを承けて史部に「地理記」があり、旧新「唐志」では乙部史録に「地理類」がある。天文類に關しては、阮孝緒の『七錄』では、「漢志」と同じく技術録に天文部があり、その一方で「隋志」には子部に天文篇が部立されており、旧新「唐志」は丙部子録に天文類がある。

【原文】

天文則宣夜^{〔二〕}、周髀、渾天諸家、下逮安天之論、

談天之説^{〔三〕}、或正或奇^{〔三〕}、條而列之、辨明識職^{〔四〕}、所謂道也。『漢志』所録『泰一』、『五殘星變』之屬、附條別次、所謂器也^{〔五〕}。地理則形家之言、專門立説、所謂道也。『漢志』所録『山海經』之屬、附條別次、所謂器也^{〔六〕}。以此二類、專門部勒、自有經緯^{〔七〕}、而尹咸概收術數之篇、則條理不審之咎也〔原注…『山海經』與『相人』書爲類、『漢志』之授人口實處也〕^{〔八〕}。

右十之六

【訓読文】

天文は則ち宣夜、周髀、渾天の諸家あり、下『安天』の論、『談天』の説に逮ぶまで、或いは正にして或いは奇なり、条して而して之を列べ、識職を弁明するは、所謂の道なり。『漢志』所録の『泰一』『五殘星變』の属、条に付して別に次ぶるは、所謂の器なり。地理は則ち形家の言、門を専らにして説を立つるは、所謂の道なり。『漢志』所録の『山海經』の属、条に付して別に次ぶるは、所謂の器なり。此の二類を以て、門を専らにして部勒すれば、自づから経緯有らん、而るに尹咸概術数の篇に収むれば、則ち条理審かならざる

の咎あるなり「原注：『山海経』と『相人』の書と類を為す、『漢志』の人に口実を授くる処なり」。

右十の六

【現代語訳】

天文に関しては宣夜、周髀、渾天の諸家があり、時代を降って『安天』の論、『談天』の説に及んでは、或いは正統であり或いは特異なものもあり、秩序立ててこれらを並べ、主要な職能をとき明かすことは、いわゆる道と言えよう。『漢書』芸文志に収録する『泰一』『五残星変』の類について、条に添えて区別して並べるのは、いわゆる器と言えよう。また、地理に関しては形家の言説があり、略類を専門にして学説を成立することは、いわゆる道と言えよう。『漢書』芸文志に著録される『山海経』などの類について、条に添えて区別して並べるのは、いわゆる器と言えよう。これらの異なる類について、それぞれ略類を専門にして編纂すれば、自ずと理想的なものになるのだが、尹咸は概ね数術略に収録するにより、その弊害として条理が不明瞭となるのである「原注：『山海経』と『相人』の書を同類と

しているのは、『漢書』芸文志が後世の人に語り種とされる所である」。

以上十の六

【訳注】

一 「宣夜」「周髀」「渾天」は天文学を業とする学派、「漢志」には未収であるが、官職としては古くより存在していたようで、『晉書』天文志・天体篇には次のようにある。「古言天者有三家、一曰蓋天、二曰宣夜、三曰渾天。漢靈帝時、蔡邕於朔方上書、言『宣夜之學、絶無師法。周髀術數具存、考驗天狀、多所違失。惟渾天近得其情、今史官候臺所用銅儀則其法也。立八尺員體而具天地之形、以正黃道、占察發斂、以行日月、以步五緯、精微深妙、百代不易之道也。官有其器而無本書、前志亦闕。』これに拠れば蔡邕（二三）（一九二）は、「宣夜」の学問は滅び、「周髀」の学問は概ね残されているが違える所もあり、「渾天」こそ重視すべきこと、官職に「器」はあるも「書」が無く、「前志」には欠けていると述べている。なお、蔡邕の言う「前志」は「漢志」を指す。つまり、「漢志」の時代に既に学官として成立しているがらも、著述が無かったことが分かる。

「宣夜」は、『尚書』舜典に注された孔穎達疏に「虞喜云、宣、明也。夜、幽也。幽明之數、其術兼之。故曰宣夜。」とあり、先に挙げた『晉書』天文志では、「成帝咸康中、會稽虞喜因宣夜之説作安天論、以爲天高窮於無窮、地深測

於不測。天確乎在上、有常安之形、地魄焉在下、有居靜之體。當相覆冒、方則俱方、員則俱員、無方員不同之義也。其光曜布列、各自運行、猶江海之有潮汐、萬品之有行藏也。」とあるように、「宣夜」に基づき作られた「安天」として説明されている。

二 『史記』荀卿伝に「荀卿、趙人。年五十始來游學於齊。騶衍之術迂大而閎辯。爽也文具難施。淳于髡久與處、時有得善言。故齊人頌曰、談天衍、雕龍奭、炙轂過髡。」とあり、集解引く劉向の『別録』には、「騶衍之所言五德終始、天地廣大、盡言天事、故曰談天。騶奭脩衍之文、飾若雕鏤龍文、故曰雕龍。」とある。

三 章氏が「安天之論、談天之説、或正或奇」とするのは、『晉書』天文志・天体篇に「自虞喜、虞聳、姚信皆好奇徇異之説、非極數談天者也。至於渾天理妙、學者多疑。」とあるのに基づくのであろう。なお、ここにいう「虞喜」は、東晋の学者、「隋志」子部・天文篇には彼の著作として「安天論六卷」が収録される。

四 唐韩愈「南陽樊紹述墓志銘」に「既極乃通發紹述、文從字順各識職、有欲求之此其闕。」とあるように、それぞれの分別をわきまえて職能を果たしていることをいう。

五 章氏は古くから存在していた「宣夜」「周髀」「渾天」の諸家の学問を整理すること、併せてそれぞれの職能を解明することを「道」とし、その下に「漢志」術数略・天文類に著録される「泰壹雜子星二十八卷」「五殘雜變星二十一卷」

を分類・配列すること、これを「器」とするのである。

六 「漢志」術数略・形法類には「山海經十三篇」「國朝七卷」「宮宅地形二十卷」「相寶劍刀二十卷」「相六畜三十八卷」が著録されており、その篇序に「形法者、大舉九州之勢以立城郭室舍、形人及六畜骨法之度數、器物之形容以求其聲氣貴賤吉凶。猶律有長短、而各徵其聲、非有鬼神、數自然也。然形與氣相首尾、亦有有其形而無其氣、有其氣而無其形、此精微之獨異也。」とある。『山海經』は「隋志」では史部の地理記に収録され、旧新「唐志」では乙部史録の地理類に収録されているように、後世の目錄分類では概ね地理書として認識されている。もつとも『四庫提要』が「諸家續以爲地理書之冠、亦爲未允。核實定名、實則小說之最古者爾。」とするのが今の通説であらう。また「漢志」で同じ数術略・形法類に分類される『相人』は、『春秋左氏傳』文公元年に「公孫敖、聞其能相人也、其見二子焉。」とあり、「荀子」非相篇に「相人、古之人無有也、學者不道也。古者有姑布子卿、今之世梁有唐舉、相人之形狀、顔色、而知其吉凶妖祥。」などとあるように、人相見の著述である。張舜徽は後世における『相人』と類する著述として「隋志」子部・五行類に分類される「相書四十六卷」「相經要録二卷」「相手板經六卷」などを挙げている。章氏は「漢志」形法類におけるそもその分類のあり方を捉え直し、地理の専門的な略類を部立すること、これを「道」とし、その下に『山海經』などを配列することを「器」とするのである。

七 『春秋左氏傳』昭公二十五年に「禮上下之紀、天地之經緯也。」と見え、杜預注に「經緯、錯居以相成者。」とあり、孔穎達疏に「言禮之於天地、猶織之有經緯。得經緯相錯乃成文、如天地得禮始成就。」とあるのに基づく。

八 「十之四」注六を参照。

【原文】

地理形家之言、若主山川險易、關塞邊防、則與兵書形勢之條相出入矣^{〔一〕}。若主陰陽虛旺、宅墓休咎、則與尚書五行相出入矣^{〔二〕}。部次門類、既不可缺、而著述源流、務要於全、則又重複、互注之條、不可不講者也。任宏兵書一略、鄭樵稱其最優^{〔三〕}。今觀劉『略』重複之書、僅止十家、皆出兵略、他部絕無其例^{〔四〕}。是則互注之法、劉氏且^{〔五〕}未能深究、僅因任宏而稍存其意耳。班氏不知而刪併之、可勝惜哉。

右十之七

【訓読文】

地理形家の言、山川險易、関塞边防を主とするが若きは、則ち兵書形勢の条と相い出入す。陰陽虚旺、宅墓休咎を主とするが若きは、則ち尚書五行と相い出入

す。部次門類、既に缺くべからず、而して著述の源流、務めて全きを要^{もと}むれば、則ち又た重複、互注の条も、講かざるべからざるの者なり。任宏の兵書の一略、鄭樵は其の最も優るを称す。今劉の『略』の重複の書を觀るに、僅かに十家に止まる、皆な兵略より出で、他の部絶えて其の例無し。是れ則ち互注の法、劉氏すら且つ未だ能く深究せず、僅かに任宏に因りて稍や其の意を存するのみ。班氏は知らずして刪して之を併せるは、惜しむに勝うべきかな。

右十之七

【現代語訳】

地理形家の言説で、山川險易、関塞边防について重視しているものは、兵書類の形勢家の条と互に通じ合っている。陰陽虚旺、宅墓休咎を重視しているものは、尚書類や五行類と互に通じ合っている。著述を分類・配列することは、欠くことの出来ないことであり、著述の淵源とその変遷は、出来るだけ完全さを求めるもので、また重複、互注の条について、講じないわけにはならない。任宏の兵書略について、鄭樵は最

も優れていると称賛する。今、改めて劉歆の『七略』の重複している書物に鑑みると、僅かに十家足らずで、そのすべては兵書略から出ており、他の略類では一切その例が見られない。すなわち互注の法は、劉歆でさえなお探求しておらず、僅かながらに任宏によってその「互著」の意義を残しているばかりである。班固はその意義を理解せずに削り取って一つに併せてしまったことは、実に惜しいことではないか。

右十之七

【訳注】

一 章氏が「十之四」で兵書の「道」とした『孫子』の形篇では、「兵法、一曰度、二曰量、三曰數、四曰稱、五曰勝。地生度、度生量、量生數、數生稱、稱生勝。故勝兵若以鎗稱銖、敗兵若以鎗稱銖。」とあり、また、地形篇や九變篇では、戦において地理をよく把握することの重要性が説かれている。

二 「十之五」注五を参照。また、「漢志」術數略・形法類に著録する「宮宅地形二十卷」について、姚振宗は『漢書藝文志條理』で次のように述べている。『論衡』數引圖宅術、又引圖墓書、又引葬歷、則漢時亦有相墓之書。『隋書』經籍志五行家有『宅吉凶論』『相宅圖』『唐志』有『五姓宅經』

『崇文總目』有淮南王『見機八宅經』及今相傳『黃帝宅經』大抵皆祖述于是書。而相墓之術、王仲任言鑿鑿、意亦在是書也。」

三 「十之四」注五を参照。

四 「漢志」兵書・權謀家の「右兵權謀十三家、二百五十九篇」に付された班固の注に「省伊尹、太公、管子、孫卿子、鶡冠子、蘇子、蒯通、陸賈、淮南王二百五十九種。」とあるのに基づく。「互著」(三之三)

五 章氏遺書本は「且」字を「具」字に作っており、この点に関して王重民は、「章華紱刻本『具』作『且』然作『具』似較好。」とするが、ひとまず底本に従うこととした。

【原文】

後世法律之書甚多^{〔一〕}、不特蕭何所次律令而已也。

就諸子中掇取申、韓議法家言^{〔二〕}、部於首條、所謂道也^{〔三〕}。其承用律令格式之屬、附條別次、所謂器也。

後世故事之書甚多^{〔四〕}、不特張蒼所次章程而已也。就

諸子中掇取論治之書、若『呂氏春秋』^{〔原注〕}「漢志」入於雜家^{〔五〕}、非也。其每月之令文、正是政令典章^{〔六〕}、後世會典會要

「七」之屬^{〔八〕}、賈誼^{〔九〕}、董仲舒^{〔一〇〕}「原注」治安之奏、天

人之策、皆論治體。『漢志』入於儒家類矣^{〔一〕}諸家之言、部於首條、所謂道也。其相治典章故事之屬、附條別次、所謂

器也。例以義起、斟酌損益、惟用所宜。豈有讀著錄部次、而不能考索學術源流者乎。

右十之八

【訓詁文】

後世 法律の書甚だ多し、特だ蕭何の次^つづる所の『律令』のみならざるなり。諸子中に就きて申、韓議法家の言を掇取し、首条に部するは、所謂の道なり。其の律令格式を承用するの属、条を付して別に次ぶるは、所謂の器なり。後世 故事の書甚だ多し、特だ張蒼の次づる所の『章程』のみならざるなり。諸子中に就きて論治の書を掇取すれば、『呂氏春秋』「原注…『漢志』の雑家に入るが若きは、非なり。其の毎月の令文、正に是れ政令典章にして、後世の会典会要の属なり」、賈誼、董仲舒の「原注…治安の奏、天人の策、皆な治体を論ず。『漢志』は儒家類に入る」諸家の言の若き、首条に部するは、所謂の道なり。其の典章故事を相沿するの属、条を付して別に次ぶるは、所謂の器なり。例は義を以て起こし、損益を斟酌し、惟だ宜しき所を用う。豈に著録の部次を読み、而して學術の源流を考索する能わざる者有らんや。

右十の八

【現代語訳】

後世に法律に関する著述は非常に多くなり、ひとり蕭何の編纂した『律令』だけではない。諸子略中について申すと韓非などの議法の学派の言説を拾い取り、首条に配列することは、いわゆる道と言えよう。その律令格式を因襲する類について、秩序立てて区別して並べることは、いわゆる器と言えよう。後世に故事に関する著述は非常に多くなり、ひとり張蒼の編纂した『章程』だけではない。諸子略中について治国に関する著述を拾い取り、『呂氏春秋』「原注…『漢志』の雑家に分類しているのは、誤りである。これは毎月の令文であり、まさに政令典章の類であり、後世の会典会要の属である」、賈誼、董仲舒などの「原注…治安の奏、天人の策は、すべて治国の綱領について論じている。『漢志』は儒家類に収録している」諸家の言説のごとき、首条に配列することは、いわゆる道と言えよう。その典章故事を沿襲する類について、秩序立てて区別して並べることは、いわゆる器と言えよう。体例というものは道理によつて始まり、利点を良く取り上

げて、ただ善いものを利用する。どうして著録の分類と配列のあり方を閲読して、学術の淵源とその変遷を考究し得ないものがあるうか。

以上十の八

【訳注】

一 後世の「法律」に関する略類は阮孝緒の『七録』紀伝録に部立された「法制部」、また、「隋志」では、史部の「刑法篇」がそれに相当する。「隋志」刑法篇には部立の由来を次のように述べている。「刑法者、先王所以懲罪惡、齊不軌者也。『書』述『唐』虞之世、五刑有服、而夏后氏正刑有五、科條三千。『周官』、『司寇掌三典以刑邦國。司刑掌五刑之法、麗萬民之罪。太史又以典法逆于邦國。内史執國法以考政事。』『春秋傳』曰、『在九刑不忘。』然則刑書之作久矣。蓋藏于官府、懼人之知爭端、而輕於犯。及其末也、肆情越法、刑罰僭濫。至秦、重之以苛虐、先王之正刑滅矣。漢初、蕭何定律九章、其後漸更增益、令甲已下、盈溢架藏。晉初、賈充、杜預、刪而定之。有律、有令、有故事。梁時、又取故事之宜於時者爲『梁科』後齊武帝時、又於麟趾殿刪正刑典、謂之『麟趾格』。後周太祖、又命蘇綽撰『大統式』。隋則律令格式並行。自律已下、世有改作、事在刑法志。漢律久亡、故事駁議、又多零失。今錄其見存可觀者、編爲刑法篇。」また「隋志」では「三十五部、七百一十二卷」が

著録され、「旧唐志」では乙部史録・刑法類に「五十一部、凡八百一十四卷」、「新唐志」乙部史録・刑法類では「二十八家、六十一部、一千四卷」が著録されている。

二 「十之二」注五を参照。

三 章氏が「諸子中掇取申、韓議法家言」を「道」とするのは、卷一「別裁」の理念、「裁篇別出之法」(四之二)に近しい。つまり、法家における法律に関する記載を抜き出し、新たな著述を編纂して、その著述のもとに新たな略類を創設することを「道」とし、その上で、より専門的な律令格式の著述を順序よく配列すること、これを「器」とするのである。

四

後世の「故事」に相当する略類は阮孝緒の『七録』紀伝録に部立された「舊事部」、「隋志」史部、及び「旧唐志」乙部史録の「舊事篇」がそれに相当する。なお、「故事」の名称を含んで部立するようになるのは「新唐志」乙部史録の「故事類」からである。「隋志」史部・旧事篇に付された篇序では次のようにある。「古者朝廷之政、發號施令、百司奉之、藏于官府、各修其職、守而弗忘。『春秋傳』曰『吾視諸故府』、則其事也。『周官』、『御史掌治朝之法』『太史掌萬民之約契與質劑、以逆邦國之治。』然則百司庶府、各藏其事、太史之職、又總而掌之。漢時、蕭何定律令、張蒼制章程、叔孫通定儀法、條流派別、制度漸廣。晉初、甲令已下、至九百餘卷、晉武帝命車騎將軍賈充、博引羣儒、刪采其要、增律十篇。其餘不足經遠者爲法令、施行制度者爲令、品式

章程者爲故事、各還其官府。摺紳之士、撰而錄之、遂成篇卷、然亦隨代遺失。今據其見存、謂之舊事篇。」とある。また、『隋志』史部・旧事篇に著録する「晉故事四十三卷」について、『隋書經籍志詳攷』は晋の賈充の著作と推測している。

なお、本条の注一に引用した『隋志』刑法篇に「故事駁議」とあるように「故事」をその名に含んでいる著述も、『隋志』では刑法篇に著録されている。刑法篇には「漢朝議駁三十卷應劭撰」が著録され、『七錄』に関する案語とされる下注に「梁有『建武律令故事』二卷、劉邵律略論五卷、亡。」とあり、『唐六典』では、「漢建武有律令故事上中下三篇、皆刑法制度也。」と述べられている。

五 『呂氏春秋』は『漢志』では、諸子略・雜家類に著録されておき、『漢志』篇序に「雜家者流、蓋出於讖官。兼儒、墨、合名、法、知國體之有此、見王治之無不貫、此其所長也。」とあり、顔師古は、「治國之體、亦當有此雜家之說。王者之治、於百家之道無不貫綜。」と注している。また、章氏は「漢志諸子」の「十四之三十一」で、『爾雅』之釋草、『管子』之牧民、『呂氏春秋』任地諸篇、俱當用裁篇別出之法、冠於農家之首者也。」と述べている。

六 『会典』は、政治書の一つで唐玄宗の勅撰である『唐六典』を以て嚆矢とする。『唐六典』の構成は『周礼』に擬して唐の官職を三師、三公、三省、九寺、五監、十二衛に類別し、その職官官佐を並べ、その品秩を序したものの。これ

に倣つて『元典章』『明会典』『清会典』などがある。(玉井是博「大唐六典及通鑑の宋刊本に就いて」『支那学』七二、一九三四年所収)

七 「会要」は一代の政治、社会、経済などの制度を明らかにし、その歴史の変遷を説いたもの。『唐会要』『五代会要』『宋会要』などがある。(花房英樹「会要について」『支那学研究特輯』第十一号、一九五四年九月)

八 章氏は『文史通義』卷七「亳州志掌故例議中」の中で「会典会要」について次のように述べている。「史學亡於唐、而史法亦莫具於唐。歐陽『唐志』未出、而唐人已有窺於典章制度、不可求全於史志也。劉氏有『政典』杜氏有『通典』、並仿『周官』六典、包羅典章、鉅細兼收、書盈百帙。未嘗不曰君臣事跡、紀傳可詳、制度名數、書志難於賅備、故修之至汲汲也。至於宋初王氏有『唐會要』『五代會要』、其後徐氏更爲『兩漢會要』、則補苴前古、括代爲書。雖與劉、杜之典、同源異流、要皆綜核典章、別於史志、義例昭然、不可易矣。夫唐宋所爲典要、既已知彼、後人修唐宋書、即以其法、紀綱唐宋制度、使與紀傳之史、相輔而行、則『春秋』『周禮』並接源流。奔世遵行、不亦善乎。何歐陽述『唐』『元人纂』『宋』反取前史未收之器數、而猥加羅列、則亦不善度乎時矣。或謂『通典』『會要』之書、較馬班書志之體爲加詳耳。其於器物名數、亦復不能甄綜賅備、故考古者不能不參質他書、此又非知言也。」

九 賈誼は、『漢書』卷四十八に立てられた伝に「過秦論」や

「鵬鳥賦」、また、对匈奴として述べられた所謂「治安策」(現行本「匈奴」などを収録する。「漢志」諸子略・儒家類に著録される「賈誼五十八篇」は、現行の『新書』とされている。なお、賈誼『新書』について陳振孫は『直齋書錄解題』で、「漢長沙王太傅洛陽賈誼撰。『漢志』五十八篇。今書首載『過秦論』。末爲『弔湘賦』。餘皆錄『漢書』語。且略節誼本傳於第十一卷中。其非『漢書』所有者輒淺駁、不足觀、決非誼本書也。」と偽作とする見解を述べており、これに対して『四庫提要』は、「今考『漢書』誼本傳贊、稱『凡所著述五十八篇、掇其切於世事者著於傳。』應劭『漢書註』亦於『過秦論』下註曰、『賈誼書第一篇名也』、則本傳所載皆五十八篇所有、足爲顯證。贊又稱『三表五餌、以係單于』。顏師古註所引賈誼書、與今本同、又『文帝本紀』註引賈誼書『衛侯朝於周、周行人問其名』、亦與今本同、則今本卽唐人所見、亦足爲顯證。然決無摘錄一段立一篇名之理、亦決無連綴十數篇、合爲奏疏一算上之朝廷之理。疑誼『過秦論』、『治安策』等、本皆爲五十八篇之一、後原本散佚、好事者因取本傳所有諸篇、離析其文、各爲標目、以足五十八篇之數、故餽釘至此。其書不全眞、亦不全僞。」とする。

一〇 董仲舒は『漢書』卷五十六に伝が立てられており、「漢志」諸子略・儒家に「董仲舒百二十三篇」が著録され、六芸略・春秋類に「公羊董仲舒治獄十六篇」が著録されている。現行の『春秋繁露』の著者として伝えられており、章氏という「天人之策」は、所謂「天人三策」の事を指して

いるのであろう。本伝には、「仲舒所著、皆明經術之意、及上疏條教、凡百二十三篇。而說『春秋』事得失、『聞舉』『玉杯』『蕃露』『清明』『竹林』之屬、復數十篇、十餘萬言、皆傳於後世。掇其切當世施朝廷者著于篇。」とある。参考までに張舜徽の『春秋繁露』に関する解説を掲げておく。「其書自『楚讓王』第一至『天道施』第八十二、凡八十二篇。其書發明春秋大義者、僅十之四五。其餘多篇、率泛論性與天道及治國之要。」なお、王先謙は「董仲舒百二十三篇」について、「是此百二十三篇早亡、不在『繁露』諸書内也。」と述べている。

【原文】

或曰、『漢志』失載『律令』『章程』^{〔二〕}、固無論矣。假令當日必載『律令』『章程』、就劉、班之『七略』類例、宜如何歸附歟。答曰、『太史公書』之附春秋、『封禪羣祀』之附禮經、其遺法也^{〔三〕}。律令自可附於法家之後。章程本當別立政治一門、『漢志』無其門類^{〔四〕}。然『高祖傳』十三篇、『孝文傳』十一篇〔原注…班固自注、高祖與大臣述古語及策也〕^{〔四〕}、皆屬故事之書、而劉、班次於諸子儒家、則『章程』亦必附於此矣。大抵『漢志』疎略、由於書類不全、勉強依附。至於虛論其理與實紀

其蹟者、不使體用相資、則是『漢志』偶疎之處〔原注…禮經、春秋兵書、方技、便無此病〕〔五〇〕。而後世之言著錄者、不復知其微意矣。

右十之九

【訓読文】

或るひと曰く、『漢志』の『律令』『章程』を失載すること、固より論無し。仮令い当日必^{たと}ず『律令』『章程』を載せなば、劉、班の『七略』の類例に就きて、宜しく如何に帰付すべきや」と。答えて曰く、『太史公書』の春秋類に付し、『封禪群祀』の礼経類に付するは、其の遺法なり。『律令』は自づから法家の後に付すべし。『章程』は本、当に別に政治の一門を立つるべきも、『漢志』に其の門類無し。然るに『高祖伝』十三篇、『孝文伝』十一篇は〔原注…班固の自注に、「高祖大臣と古を述ぶるの語、及び詔策なり」と、皆な故事の書に属す、而して劉、班諸子の儒家に次づれば、則ち『章程』も亦た必ずや此に付さん。大抵『漢志』の疎略は、書類の全からざるに、勉強依付するに由る。虚しく其の理を論ずると実に其の蹟を紀す者に至りて、体用をし

て相い資けしめざるは、則ち是れ『漢志』の偶々疎なる処なり〔原注…礼経、春秋、兵書、方技、便ち此の病無し〕、而して後世の著録を言う者、復た其の微意を知らず。

右十の九

【現代語訳】

ある人は次のように言つた、『漢書』芸文志が『律令』『章程』を収録し損なつたことは言うまでもない。もし当時どうしても『律令』『章程』を収録するのであれば、劉歆、班固の『七略』の体例に拠れば、どのようにに帰属すべきか。」と。それに答えて次のように言つた、『太史公書』が春秋類に添えられ、『封禪群祀』が礼経類に添えられてゐるのは、遺された編纂上の規則である。（この學術の淵源に従っている規則に照らせば）『律令』の書物はやはり法家の後に添えるのが良いであろう。『章程』は本来であれば別に政治の一略を部立すべきだが、『漢書』芸文志に政治を専門とした略類は無い。しかし『高祖伝』十三篇、『孝文伝』十一篇などは〔原注…班固の自注に、「漢の高祖が大臣と古を述べた語、及び詔策を記したもの」とある〕、すべて故事の著述に属するものであ

り、それらを劉歆、班固が諸子略の儒家に並べているのであれば、『章程』もまた必ずここに添えるべきである。大抵『漢書』芸文志が疎略としている点は、著述の類別が不完全なままに、無理矢理に帰属させていることに拠る。抽象的な道義を論じるものと具体的 な事蹟を記述している著述について、本体とその作用が互いに補い合っていないのは、『漢志』が偶々疎略にしている所であり「原注…礼経、春秋家、兵書略、方技略については、こういった欠点は無い」、後世に著録について言及するものは、その隠微な意義を分かっているといふのである。

以上十の九

【訳注】

- 一 「十之二」注三を参照。
- 二 「十之三」注三及び注四を参照。
- 三 「十之二」注三、「十之八」注四を参照。
- 四 「漢志」諸子略・儒家に「高祖傳十三篇」が著録され、班固の注に「高祖與大臣述古語及詔策也」とある。梁啓超は、「此及『孝文傳』、以入儒家、本無取義。殆因編『七略』時未有史部、詔令等類可帰、姑入於此耳。」とする。また、同じく諸子略・儒家に「孝文傳十一篇」が著録され、班固

の注に「文帝所稱及詔策。」とある。なお、「詔策」はみことのを書き付けたもの。『漢書』淮陽憲王欽伝に「王幸受詔策、通經術、知諸侯名譽不當出竟。」とあり、集解引く如淳の注には、「詔策、若廣陵王策曰『無遵宵人、毋作匪德』也。經術之義、不得内交。」とある。

五 章氏の礼経類、春秋類に対する評価は「十之三」本文、及び「十之三」注三、注四を参照。また、兵書略、方技略に関しては「十之四」本文、及び「十之四」注八を参照。

【原文】

鄭樵議『章程』『律令』之不載『漢志』、以爲劉、班之疎漏^{〔一〕}。然班氏不必遽見西京之全書、或可委過於劉『略』也。若劉向『別錄』劉歆『七略』、則班氏方據以爲藝文之「要刪」^{〔二〕}、豈得謂之不見其書耶。此乃後世目錄^{〔三〕}之鼻祖、當時更無其門類、獨不可附於諸子名家之末乎。名家之敍録曰。「名不正、則言不順。言不順、則事不成。」^{〔四〕}著録之爲道也、即於文章典籍之中、得其辨名正物之意、此『七略』之所以長也。又云。「警者爲之、則苟鉤鈇析亂而已。」此又後世著録、紛拏^{〔五〕}不一之弊也。然則凡以名治之書、固有所以附矣「原注…後世目錄多、即可自爲門類」。

右十之十

【訓読文】

鄭樵は『章程』『律令』の『漢志』に載らざるを議して、以て劉、班の疎漏と為す。然るに班氏は必ずしも遽かに西京の全書を見ず、或いは過を劉『略』に委ぬべきなり。劉向『別録』劉歆『七略』の若きは、則ち班氏の方に拠りて以て芸文の「要刪」を為す、豈に之を其の書を見ざると謂うを得んや。此れ乃ち後世の目録の鼻祖、当時更に其の門類無し、独り諸子の名家の末に付すべからざるか。名家の叙録に曰く、「名正しからざれば、則ち言順ならず。言順ならざれば、則ち事成らず。」と。著録の道為るや、即ち文章典籍の中に於いて、其の弁名正物の意を得たるは、此れ『七略』の以て長ずる所なり。又云う、「警者之を為せば、則ち苟だ鉤鈇析乱するのみ」と。此れ又後世の著録、紛拏として一ならざるの弊なり。然らば則ち凡そ名治の書を以て、固より以て付す所有るなり「原注…後世の目録繁多なり、即ち自から門類を為すべし」。

右十の十

【現代語訳】

鄭樵は『章程』『律令』を『漢書』芸文志に収録していないことを議論して、劉歆、班固の欠点とした。しかし班固は必ずしも容易に前漢期すべての著述を閲覧出来たわけではないだろうし、ことによってはこの過失を劉歆『七略』に委ねるべきものであろう。しかし劉向『別録』劉歆『七略』のごときは、班固はまさにこれに依拠して芸文志の「冗漫な文章を削りその要点を取る」としており、どうしてこのように述べていながら、その(劉向・劉歆の)著述を見ていないと言うことがあるのか。劉歆『七略』はやはり後世の目録の元祖であり、当時は全くその『七略』などの目録類を収録する略類は無かったとは言え、どうして諸子略の名家の末に添えられなかったのか。名家の叙録には次のように言っている、「名分が正しくないと、その人の言うことが道にはずれる。言うことが道にはずれば事は成就しない」と。著録の道と言うものは、すなわち文章・典籍の中における名分を弁じて事柄を正すという意義を理會することにあり、これ(を理會しているの)が『七略』の最も優れた所である。また、次のようにも

言う、「人のあげ足を取って失策を暴く者が名家の理論を利用すれば、徒らに人の言葉に鍵を引つ掛けてやみくもに分析して真実を破綻させるばかりである」と。これはまた後世の著録にあつても、雑然と生じている様々な弊害(であり、後世の著録のあり方を的確に言い得たもの)である。それならばすべて名分治道の著述であれば、もともと(目録類を)収録する名家の略類があるのである[原注…後世の目録は繁雑であり、やはりおのずと略類をつくるべきである]。

以上十の十

【訳注】

一 「十之二」、及び注三を参照。

二 「漢志」序文に「歎於是總羣書而奏其七略、故有輯略、有六藝略、有諸子略、有詩賦略、有兵書略、有術數略、有方技略。今刪其要、以備篇籍。」とあり、顔師古の注に「刪去浮冗、取其指要也。」とある。

三 目録類を収録する略類は阮孝緒の『七錄』では「記傳錄」に「簿錄部」が部立されており、「隋志」では史部に「簿錄篇」がある。また、旧新「唐志」では、乙部史録に「目録類」(旧唐志)の本文には「右雜四部書目十八部、凡二百一十七卷」とある。なお、劉向『別錄』劉歆『七略』は「隋志」から旧

新「唐志」まで著録されており、その後の史書における目録類には見えない。「隋志」には、部立の由来を説いて次のようにある。「古者史官既司典籍、蓋有目録、以爲綱紀、體制埋滅、不可復知。孔子刪『書』、別爲之序、各陳作者所由。韓、毛二詩、亦皆相類。漢時劉向『別錄』、劉歆『七略』、剖析條流、各有其部、推尋事迹、疑則古之制也。自是之後、不能辨其流別、但記書名而已。博覽之士、疾其渾漫、故王儉作『七志』、阮孝緒作『七錄』、並皆別行。大體雖準向、歆、而遠不逮矣。其先代目録、亦多散亡。今總其見存、編爲簿錄篇。」

四 「漢志」諸子略・名家の篇序に「名家者流、蓋出於禮官。

古者名位不同、禮亦異數。孔子曰、『必也正名乎。名不正則言不順、言不順則事不成。』此其所長也。及警者爲之、則苟鉤鉤析亂而已。」とあり、顔師古は、「論語載孔子之言也。言欲爲政、必先正其名。」と注している。

五 『楚辭』九思の「悼亂」篇に「嗟嗟兮悲夫、殺亂兮紛拏。」とあり、王逸は、「君任佞巧、競疾忠信、交亂紛拏也。」と注している。